

土砂災害の脅威にさらされる 北アルプスを主な活動の場として、 貴重な自然と流域の安全を守る松本砂防。

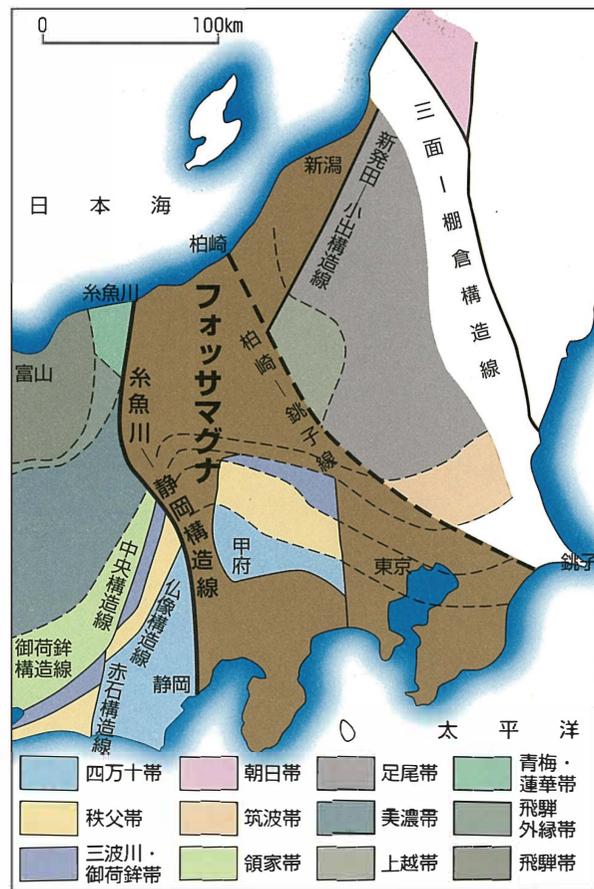
松本砂防事務所では、北アルプスの山なみに沿って梓川、高瀬川、姫川と3つの流域をフィールドとして砂防事業を推進しています。北アルプスと呼ばれる飛騨山脈は、3000メートル級の高山が連なる雄大な山岳景観を誇っていますが、日本列島を南北に縦断する断層群「糸魚川—静岡構造線」、その東側に広がる「フォッサマグナ」、たびたび噴火を繰り返してきた焼岳など、その生い立ちをたどると隆起、断層、造山運動、火山活動などによる複雑な地殻変動を受けており、その大地の営みは今なお続いています。こうしたきわめて脆弱な地質構造をもつ急峻な地形からは、膨大な土砂が絶え間なく生産・流出され、流域の各所で荒廃が進行しており、気候変動に伴う豪雨の激甚化、頻発化が想定される中、土砂災害の脅威は高まるばかりです。

●フォッサマグナと糸魚川—静岡構造線

ドイツの地質学者、E・ナウマンによって着目され、名づけられた「フォッサマグナ」。ラテン語で“大きな割れ目”という意味で、日本列島として形を整えるころに発生したと考えられています。日本は、ここを境界にして古い地質・岩石(古・中生層と先第三紀層の花崗岩)の西南日本(ユーラシアプレート)と、新しい地層(新第三紀層の堆積岩および火山岩)のフォッサマグナ地域(北アメリカプレート)に分かれています。フォッサマグナには厚さ約10キロメートルにおよぶ堆積物があり、それが土砂災害の要因にもなっています。このフォッサマグナの西側の縁を糸魚川—静岡構造線が走っており、その北部は姫川の流路に沿っています。



●糸魚川—静岡構造線露頭部



資料/中央日本のおもな地質構造線と地質区(磯見・河田1968;山下1970;吉田ほか1976;小松ほか1985をもとに権村武作成の図に加筆)

